

第11回 江戸川大学簿記コンクール【 問題 】

第1問(20点)

次の取引について仕訳しなさい。ただし勘定科目は、次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

現	金	当	座	預	金	受	取	手	形	売	掛	金
前	払	金	未	収	金	前	払	地	代	従	業	員
建		物	備		品	支	払	手	形	買	掛	金
当	座	借	越	未	払	前	受	金		減	価	償
資	本	金	売		上	受	取	利	息	備	品	売
仕		入	給		料	支	払	家	賃	支	払	地
減	価	償	却	費		支	払	利	息	備	品	売
						損				損		益

1. 佐賀商店より商品 600,000 円を仕入れ、代金のうち 100,000 円は小切手を出して支払い、200,000 円は佐賀商店あての約束手形を振り出し、残額は月末に支払うことにした。また、商品の梱包用資材の代金および当店までの運送料の合計 10,000 円を現金で支払った。なお、引取費用等の支払いは全額当店負担である。
2. 高知商店に対し、以前より注文を受けていた商品 880,000 円を本日発送した。なお、代金のうち 80,000 円は注文時に受け取っていた内金と相殺し、300,000 円は徳島商店振出、高知商店宛ての約束手形を裏書譲渡され、残額は月末に受け取ることにした。
3. 平成 27 年 4 月 30 日に、備品を 60,000 円で売却し、代金は翌月から3回の分割で受け取るようになった。この備品(平成 22 年 8 月 1 日に 540,000 円で取得)の減価償却は定額法(耐用年数 6 年、残存価額ゼロ)、記帳方法は間接法によっている。当店の決算日は 3 月 31 日の年 1 回であり、取得年度の償却額は月割計算すること。
4. 青森商店の当期における総仕入高は、1,500,000 円、戻し高は 35,000 円、値引高は 20,000 円、期首商品棚卸高は 150,000 円、期末商品棚卸高は 120,000 円であった。また、家賃の支払高は 250,000 円、決算日における前払高は 45,000 円、借入金の利息の支払高は 100,000 円、決算日における未払高は 35,000 円であった。よって、決算整理後の諸勘定残高を損益勘定へ振り替えた。
5. 群馬商店(決算年1回、12 月 31 日)は、開業以来継続して 4 月 1 日に向こう 1 年分(每期同額)の支払地代を現金で一括して支払っている。当期(第 3 期)の決算整理前の支払地代勘定は借方残高 36,000 円であった。当期末の決算において、以下のように支払地代の繰延べにかかる決算整理仕訳を行った。

(借)前払地代 9,000 (貸)支払地代 9,000

この仕訳が正しければ借方勘定科目欄に「仕訳不要」と記入し、誤っていれば訂正仕訳を示しなさい。なお、訂正にあたっては、修正部分のみを訂正する方法によること。

第2問(10点)

以下に示す1～5の仕訳について、その仕訳が示す取引等の内容を表している文章を【甲群】より、また、その仕訳の簿記手続上の分類を【乙群】より、適切なものを一つずつ選び記号で答えなさい。なお、選択群の中には解答に無関係のもの、選択が重複するものも含まれている。

表示した仕訳(取引)に相互に関連はない。また、金額は便宜上すべて10,000円で表示してある。

	仕 訳			
	借 方 科 目	金 額	貸 方 科 目	金 額
1	貸 倒 引 当 金	10,000	貸 倒 損 失	10,000
2	損 益	10,000	貸 倒 引 当 金 繰 入	10,000
3	貸 倒 引 当 金 繰 入	10,000	貸 倒 引 当 金	10,000
4	貸 倒 引 当 金	10,000	売 掛 金	10,000
5	買 掛 金	10,000	受 取 手 形	10,000

【甲群】取引を示す文章

- イ. 仕入先に対する買掛金を支払うため、小切手を振り出した。
- ロ. 売掛金(前期以前販売分)を貸倒れ処理した。前期末決算において貸倒引当金を設定している。
- ハ. 仕入先に対する買掛金を支払うため、約束手形を振り出した。
- ニ. 仕入先に対する買掛金を支払うため、得意先から受け取った約束手形を裏書譲渡した。
- ホ. 売上債権の期末残高に対して貸倒引当金を見積り計上した。
- ヘ. 前期以前に貸倒れ処理した売掛金を現金で回収した。
- ト. 当期純損益算定のために、貸倒引当金繰入勘定の残高を損益勘定に振り替えた。
- チ. 売掛金(当期販売分)を貸倒れ処理した。前期末決算において貸倒引当金を設定している。
- リ. 前期以前販売分の売掛金の貸倒れを、当期販売分のもので誤って処理していたため修正した。

【乙群】仕訳の簿記手続上の分類

- A. 期首再振替仕訳
- B. 期中取引仕訳
- C. 訂正仕訳
- D. 決算整理仕訳
- E. 決算振替仕訳

第3問(10点)

茨城商店の5月中の買掛金に関する取引記録は次のとおりである。①、②に帳簿名、③～⑩には適切な語句または金額を、それぞれ答案用紙に記入しなさい。なお、商品売買の記帳は3分法により、補助簿(②)に両商店以外は存在しない。

主 要 簿			
①			
買 掛 金			
5/9	(③) ()	5/1	前月繰越 540,000
15	当座預金 (④)	7	() (⑥)
25	() (⑤)	20	" 280,000
31	次月繰越 ()	/	
	()	/	
	<u> </u>	<u> </u>	

補 助 簿			
②			
東 京 商 店			
5/9	返 品 9,000	5/1	前月繰越 216,000
15	支 払 い 627,000	7	仕 入 れ 520,000
31	次月繰越 (⑦)	/	
	()	/	
	<u> </u>	<u> </u>	
千 葉 商 店			
5/15	支 払 い (⑧)	5/1	前月繰越 (⑨)
25	値 引 き 6,000	20	仕 入 れ (⑩)
31	次月繰越 374,000	/	
	()	/	
	<u> </u>	<u> </u>	

第4問(16点)

次の文章のうち、正しいものには「○」誤っているものには「×」をつけなさい。なお、全て「○」もしくは「×」と回答した場合には、全問不正解とする。

① 仕訳とは、資産・負債・資本の取引要素を用いて、借方の要素と貸方の要素に分解して記録することをいう。
② 総勘定元帳とは、発生した取引について仕訳を日付順に記入する帳簿である。
③ 決算手続には、決算予備手続・決算本手続・精算表の作成が含まれる。
④ 決算振替仕訳後の資産、負債および純資産の各勘定を集計し、その借方合計と貸方合計の一致を確かめる表のことを合計試算表という。
⑤ 簿記でいう現金には、紙幣・硬貨である通貨のほか、他人振出小切手、株式配当金領収証、収入印紙などの通貨代用証券が含まれる。
⑥ 有形固定資産を購入した後に、その固定資産について金銭を支出した場合、取得原価を増加させる資本的支出の処理と、支出した期の修繕費として扱う収益的支出の処理がある。
⑦ 所有している手形を、営業に必要な資金の融通を受けるため、支払期日前に銀行などの金融機関に持ち込んで換金した場合には、手形借入金勘定で処理する。
⑧ 勘定式の貸借対照表の作成にあたり、貸倒引当金は負債として貸方に記載される。

第5問(22点)

次の【Ⅰ：決算日に判明した未記帳事項】および【Ⅱ：決算整理事項】について仕訳をしなさい。ただし、勘定科目は、【答案用紙】第6問の精算表で記載されているものを使用すること。なお、会計期間は平成27年4月1日から平成28年3月31日までの1年間である。

【Ⅰ：決算日に判明した未記帳事項】

- 現金過不足につき、その原因を調査していたが、広告宣伝費8,600円の記帳漏れが判明した。残額は原因が不明であり、適切に処理する。
- 商品を仕入れた際に、かつて得意先から受け取った約束手形8,400円を裏書譲渡して仕入先に渡していたが、誤って約束手形を振り出したときの仕訳を行っていたことが判明した。
- 出張していた従業員からの振込額20,000円を仮受金として処理していたが、得意先から商品の注文を受けた際の前受金であることがわかった。
- 仮払金は、当期に備品70,000円を発注した際に、購入代金の一部を頭金として支払ったものである。なお、この備品は平成28年1月1日に取得し、引渡しを受けた直後から使用を始めているが、代金の残額を平成28年4月に支払うことになっているため、備品の取得の仕訳自体が未記帳となっていることが判明した。

【Ⅱ:決算整理事項】

1. 受取手形と売掛金の期末残高に対して2%の貸倒れを見積もり、差額補充法により貸倒引当金を設定する。
2. 期末棚卸商品の単価は1個当たり@40円、期末棚卸数量は550個であった。売上原価は仕入の行で計算する。
3. 消耗品の期末未消費高は600円であった。
4. 備品について定額法により減価償却を行う。
耐用年数：5年 残存価額：ゼロ
なお、平成28年1月1日に取得した備品についても同条件で減価償却を行うが、月割計算による。
5. 手数料の未収分が900円ある。
6. 支払家賃は、店舗建物の賃借によるもので、每期同額を8月1日に12ヵ月分として支払っている。
7. 借入金270,000円(平成26年7月1日借入、期間3年間)の利息は、每期6月末と12月末に半年分を支払っている。

第6問(22点)

第5問の期末整理事項等の仕訳にもとづいて、精算表を完成しなさい。